

天

大極上
請合賣

學卓漆州上

大和馬二
本



書

書

繪雙紙は、理窟臭きを嫌ふといへども、今その理窟臭
きをもて、一ト趣向となし、三冊に述て幼童に授く。
もし其理を得る事あらば、天竺の親分も、方便を懷に
して退き、魯國の伯父も、天命を袖にして去るべし。
しからは我國の姉子なんども、清く淨とし給はん哉。

京 傳 述

人間に魂といふものあり。如何なるものぞと。男の魂は、劍なるべし。又姫小松の淨瑠璃、俊寛が云分をきけば女の魂は鏡に極りたり。又芝居の魂は銅に赤き紙を張るものなりと。その人な論は皆腦へ退けて置くがよし。又劍と鏡なりといふは皆譬なり。又年代記の端を見るに魂を九から火三つ木の山に土一七つやうあれ」とある。強なり。意より外はなきものなり。時は精氣と云



爰に江戸日本橋
 の邊りに目前屋
 理兵衛といふ有
 徳なる商人あり
 けるが、妻娘り
 て當る十月目と
 いふに出産して、
 玉の如くの男子
 を儲ければ家
 内祝詞を述べて
 さいめきける。
 「幼きは白き糸
 の如く、如何様
 にも染るものな
 りとは、宜なる
 かな。理兵衛が
 慘出生すると等
 しく彼のいびつ
 なる惡魂皮肉
 へ分け入らんと
 する所を、天帝



現はれ出給ひ、
 悪魂が手を捻ぢ
 上げ給ひ全く丸
 きよき魂を入れ
 給ふ。これ親理
 兵衛が常に一心
 の修めよき故、
 天帝恵を垂れ給
 ふ故なり。
 さて凡夫の目
 には少しも見え
 ざるこそあさま
 しけれ。
 「コ、構はずと
 行け。」
 「ハア。」
 「チヨン〜チ
 ヨン〜」
 と子龍いふ
 所なり。



理兵衛は悴を理
太郎と呼び育て
しが、よき魂日
々附添ひ守り居
ければ、成長に
従ひ利發にて行
儀よく、その上
器用にて外々の
子供とは事變り
ければ、兩親掌
中の玉の如くい
とほしみ育てけ
るにぞ、三つ子
の魂百迄と末頼
もしく見えけり。
「これは見事だ、
おれが子なが
ら後世恐るべ
しだ。餘り不
思議だが誰ぞ



に書いて貰ひ
はせぬか。」

「ほんに御器用
な御子様でござります。」

「お師匠さんが
これからは國
盡しを書いて
やるといひな
さつたよ。」

「坊はおとつき
んや、おかゝ

さんが大事だ
よ。穴一や寶
引はしねえも
んだねえ。」

魂後に癪撫で、
居る。

「ちつとさうも
ござるめえ。」



かの惡魂、理太
 郎が體へ這入ら
 んとせしを天帝
 にけちをつけら
 れてより、身の
 置所なく相應の
 體もあらば這入
 らんと思へども
 當時は儒佛神の
 尊き道、しきり
 に行はれて人皆
 惡き心を持たね
 ば、立入るべき
 所もなく宙にぶ
 らぶらして居た
 りけるが、折も
 あらば理太郎が
 體のよき魂を亡
 きものにして我
 々長く理太郎が
 皮肉の中を住家
 にせんとしみけ
 る。



「ナント此群で五十番めくらうてはないか。」
 「イ、體の株を買ひたいものだ。」
 「此頃は心學とやらがはやるから、おいらが住ひをするやうな不埒者の少ないには困る。」
 「おのれくが不所存より身を果したる者の惡魂共、中有に迷つて居る。」
 かう並んだ所は今丁半でも始るやうだ。珠數を忘れた百萬遍の場もある。



今は早や理太郎
 十六歳となりけ
 れば元服をさせ
 けるに、生れつ
 きもよくよい男
 となり、さて店
 の商賣向ある儘
 預けてさせられ
 ば、型の如く律
 義者故朝も早く
 起き、夕も遅く寢
 ねて、随分萬事
 に心を配り儉約
 を元として、親
 に孝をつくし家
 來に儲みをかけ
 算盤を常に離さ
 ず内外を守りけ
 れば、その近邊
 に評判の息子と
 なりけり。
 「額は抜かぬが
 よい。人柄が
 悪いぞや。」
 「ハイ、ハイ。」
 「よくお似合ひ
 なされませう。」



戌

大極上
請合賣

心學卓深州中

大和里店
本

香



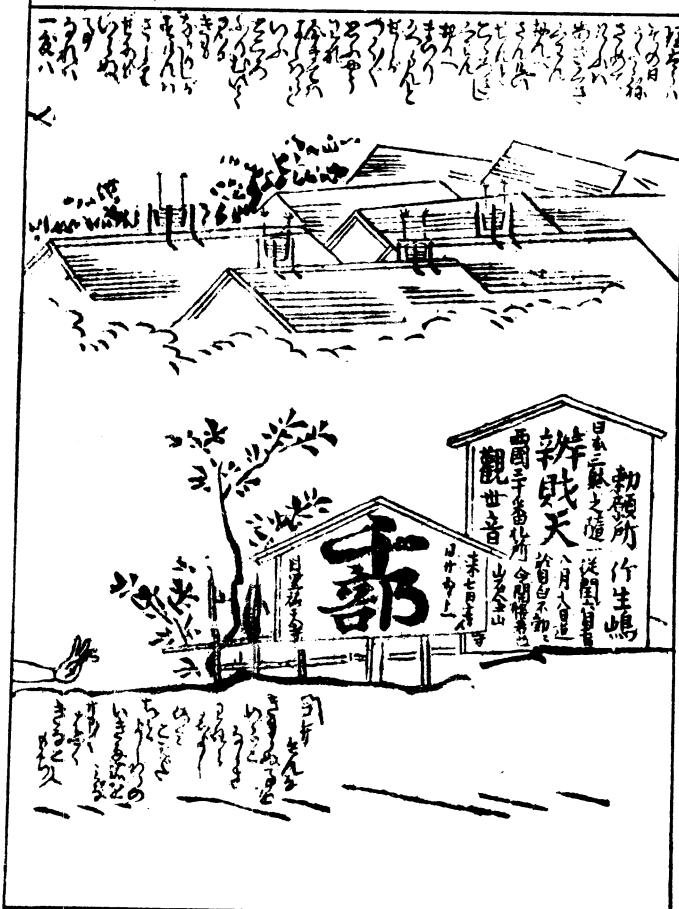
書



人の死たる時は
魂が遊びに出る
と云ふ事違ひな
し。理太郎十八
の年、ある日帳
合に被れて轉寝
しける。かの魂
日々悪き魂を近
づけまじと守り
居る事故、少し
草臥れて、理太
郎が轉寝を幸ひ
其處らへ遊びに
出しが、例の悪
魂はよき折柄
と仲間を語らひ
來り、よき魂を
縛りおき後の體
へ這入りける。
「よい氣味く」
「エ、残念な。」



理太郎はその日
轉寢覺めて今日
は淺草觀音へ參
詣せんと志し、
觀音へ詣り歸ら
んとせしがつく
／＼思ふ様、我
今迄は吉原と云
ふ所振り向いて
見る氣もなかり
しが、素見はさ
して錢も入らぬ
事なれば一度は
見ても苦しかる
まじと思ひ、う
か／＼と土手八
丁へさしかゝり
（け）る。これ悪
き魂皮肉（に）分
け入りし故なり。
「イヤ／＼行か
うとは思つた
が、内て案じ
るであらうか。



然しとても此處まで来たから一寸見て行かうか。但歸らうかと色々迷つて土手手を行きつゝ、これ惡魂の所爲なり。コレサそんなきまらぬ事を云ひつゝ、さ。我等諸事呑込だ。ちと吉原の意氣な所を見な。サア、早くきな粉餅。魂曰、おれは追剥に會つた宿引といふ身だ。ウ、メたぞ。其處だえ。おいちが身は人間の車を曳くやうだ。



理太郎は悪き魂に誘はれ吉原へ来り、素見物にて歸らんと思ひしが、仲の町の夕景色を見てよりいよく悪魂に氣を奪はれ、とある茶屋を頼みて三浦屋の怪野といふ女郎を揚げて遊びけるが、忽ち魂天上へ飛んで歸る事を忘れ、更に正氣はなかりけり。魂宙に飛んで、



踊ををどる。

「そつこでせい。」

「よいく。」

「アリヤ〜。」

「ア、いゝ匂がする。」

岡本の乙女香といふ匂だ。」

「酒に明かさぬ

夜半もなし。

それが高じた

物狂ひ。」

「ア、面白い面

白い。こんな

面白い事を今

迄知らずに居

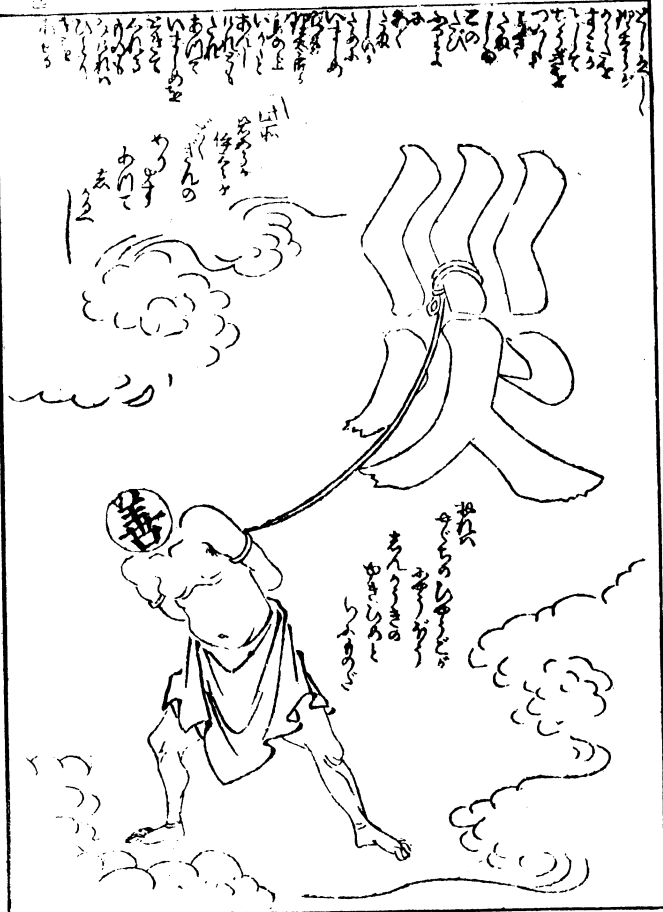
たが残念。」



「マツ今晚はこ
れきり。
ドン／＼／
く／＼。」
「うちをかぶつ
たらどうする
するものだ。」



オ、冷めてえ。
 「合點だ。」
 年久しく理太郎
 が體を住家とし
 て忠義を盡した
 る善き魂、この
 度不慮に惡魂が
 爲に縛められ、
 理太郎が身の上
 如何と案じけれ
 ども、誰あつて
 縛を解いて呉れ
 る者もなければ、
 一人氣を焦せる。
 此所、忠五郎
 か、伊三郎が
 獨吟のめりや
 すあつて然る
 べし」
 おれは矢日の
 兵庫が女房、
 信仰記の雪姫
 と云ふものだ。



[illegible]

とは歸すまじと引
 理太郎左へ引
 かるゝ時はア
 アいつそ流連
 けようと思ひ
 右へ引張られ
 る時はイヤ
 ヤ早く歸らう
 といひて歸廊
 下を行きつ
 りつ思案ま
 魂の姿凡夫の
 目には見えぬ
 故茶(尾)男は
 怪しからぬ身
 振をする客人
 「お歸りなんす
 とも居なんす
 ない馬鹿らし
 いよ」
 井戸替といふ
 身だコレ尻
 をひらつしや
 んな
 「ヨイサア」
 サア



理太郎は元の如く善き魂又入りける故、此間の女郎買の事は夢の様な心にて、思ひ出すも穢しく帳合ばかりして居たりしが、かの怪野が所から魂膽の文來りしを何心なく開きければ、又惡魂此文の中へ入り來り取つく。

茶屋男
一初會からお文の参ると申す事は、神代にもない事でござります。」
善き魂、文を見せじと氣を採む。



大極上
諸合賣

孟子集注

1-

大和田

天

本

一





理太郎、怪野が
 手を盡したる魂
 膽の文を見しよ
 り又々心迷ひ、
 おれが身上一
 年に三百や四百
 の金遣うたとて
 さのみ痛みに
 ならぬ事、千年
 は年生きる身て
 ばなし、死ねば
 錢六文より外は
 いらぬものを、
 今までは無益の
 儉約をした事ぞ
 何ぞ獨を乗つて
 遊ばざると、古
 詩を以て手前勝
 手な例に引き、
 惡念しきりに萌
 しける。
 理太郎惡念萌
 しければ此時、
 を得て、惡魂
 善き魂を切り
 殺したる頃、
 念をたちける。
 「覺悟ひるげ」
 「無念々々」



理太郎の悪念萌
 じければ此時、
 善き魂を切り
 殺したる頃、
 念をたちける。
 「覺悟ひるげ」
 「無念々々」

悪魂共遂に理太
郎が皮肉へ分入
り、よき魂の女
房二人の男子を
追出しければ、
三人手を引き合
つて年久しく住
み馴れし體を立
退くこそ哀なり。
これより理太郎
は大の放蕩者と
なり、四五日づ
つ流連する。
理太郎が番頭
迎山もどきて
「左様に御料簡
ではなかりし
入が、天魔の見
え、コレサ、そん
な野暮をいふ
が、あつても歸事

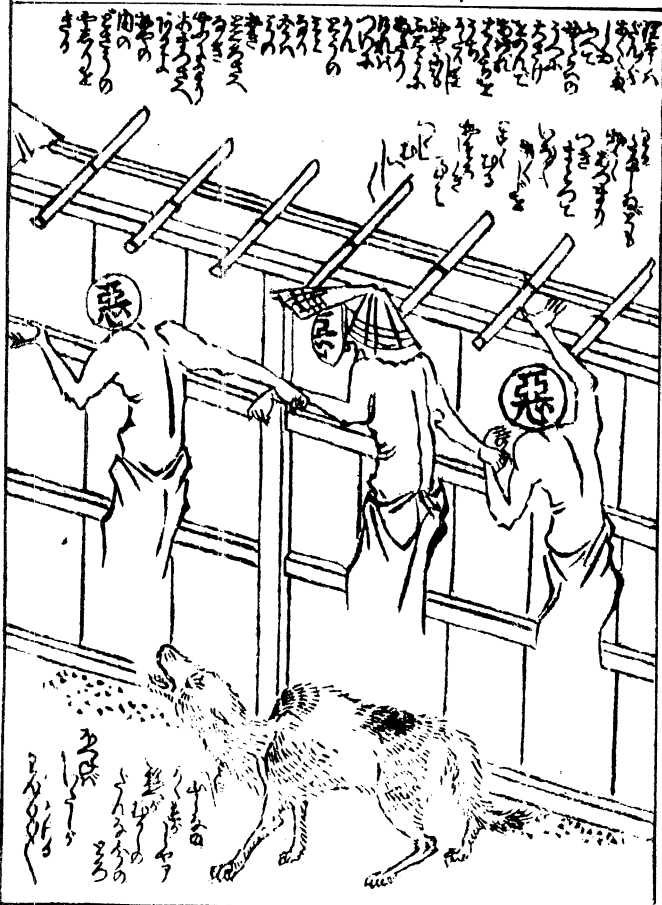


事はいやだ
 の顛だ
 女郎も理太郎
 が餘り長く居
 る故、神がつ
 て言葉に濁す
 「ほんにお父さ
 さん、お母さん
 がお案じなん
 すたらうねえ、
 わつちやアど
 うも歸し申し
 たくねえが、も
 たらう」
 魂「これからは
 おいらが世界
 だ」
 魂「ア、えい、旗
 出す」
 魂「竹にて追
 きりく立つ
 て矢しやアが
 悲しや」
 今に思ひ知ら
 せん
 悲しや
 様のいのち



理太郎は段々悪魂ふえて女郎買の上に大酒を飲んで暴れ、博奕をうち、騙をし、親にも不幸に當りければ、遂に勘當の身となり今は身の置所さへなきやうになり、あまつさへあるに親の内の土藏の家尻を切る。

悪魂共多く集り、つき纏つ



て色々悪事を
勧むる。恐し
き事也。慎し
むべし。

大目「山科の隠
家ぢやアねえ
が、昔の旦那
今の泥、吠へ
ねばわたしが
役目が缺ける。
わんわん」
斑犬よ、おれ
だわ、吠へる
な、荒神
様の吠へるな
くはどうだ。」



理太郎は遂に宿
 無しとなり、尙
 更惡魂増長して
 今は盜賊となり、
 人家離れし所へ
 出て追刺を致し
 けるこそうたて
 けれ。
 然るに又爰に博
 議秀才仁徳の世
 に、き道理先
 生と聞えたる尊
 き人在しけるが、
 或夜講釋より歸
 りがけ此所にて
 盜賊に出會ひ、



豫て手に覚えあ
 れば早速引提へ
 不惑の事に思ひ
 給ひ、如何にも
 教訓して善心に
 導かんと其罪を
 許し、同道して
 宿所へ歸り給ふ
 「憎い奴の。」
 惡魂共、おの
 れらが業にて
 今此の身にし
 て仕舞ひなが
 ら、皆々指さ
 してどつと笑
 ひけるぞ憎ら
 しき。



愛に又善き魂の
 女房、二人の悴
 は、如何にもし
 て親の敵を討た
 んと附狙へども
 悪魂は多く方人
 ある故力に及ば
 ず、無念の月日
 を送りしが、本
 心に歸りし時を
 得て、難無く本
 望を遂げれば、
 その外の悪魂は
 皆々逃げ失せけ
 るぞ心地よき
 「夫の敵、勝負
 々々」
 「思ひ知つたか
 親の敵、觀念
 しる」
 理太郎は道理先
 生に命を助けら
 れし上、儒、佛、
 神の尊き道を聴



き、今は前非を悔い本心に立歸る。道理のないはわし一人、可愛と云うてくれの鐘も、物前の金も、今はもう穢しやういひ。

「人間萬事大切なるは一心なり。皆おのれおのれが身を苦しむる。今も心は即ち魂也や。こゝの道理をとくと合點せねばならぬ。」

「此序に此本の作者をもきめねばならぬ。大分不埒ぢやさうな。」



道理先生悉く教訓して後日、前屋の兩親に勘當の詫をし給ひければ、兩親も大に喜ひ早速呼び返しければ、理太郎これより道をあきらめ、親に孝を盡し、眷族を憐み、大君子とぞなり家富み榮えける。是皆道理先生の仁徳なりと世に云ひもてはやしける。かの苦き魂の悴兩人は親の跡目を繼ぎ、長く理太郎が體を住ひとして母をも育み怠らず守りけり。これより魂居据つて再び立つ事なし。

